

演題番号：D4

僧帽弁閉鎖不全症に対して僧帽弁形成術を実施した犬の術後評価

○古越真耶^{1) 2) 3)}，四井田英樹^{1) 4)}，三木悠矢^{1) 5)}，野尻麻衣^{1) 6)}，川元誠^{1) 7)}，武村亮祐¹⁾，
棚橋智彦¹⁾，村田芙花^{1) 7)}，福永めぐみ³⁾，村上昂暉⁸⁾，内藤瑛治²⁾，岩永優斗²⁾，福永恵太³⁾

¹⁾ JACCT 心臓血管ケアチーム，²⁾ Kyoto AR 動物高度医療センター，³⁾ フクナガ動物病院，⁴⁾ 大阪医療センター 臨床工学技士室，
⁵⁾ 株式会社 Cirrus，⁶⁾ オリーブ動物医療センター，⁷⁾ 松原動物病院，⁸⁾ 柴田動物病院

1. はじめに：僧帽弁粘液腫様変性 (MMVD) による僧帽弁閉鎖不全症 (MR) は小型犬で頻発する心疾患であり、ACVIM ガイドラインに基づき Stage B2 以上の症例に対して積極的な治療介入が推奨されている。治療法の一つである僧帽弁形成術 (MVP) は、MR を根治できる可能性のある唯一の治療法であると考えられるが治療効果については十分検証されていない。そこで、MVP を実施した症例の予後及び術前と術後1年時の画像検査パラメータを比較し、治療効果を検証した。

2. 材料および方法：2020年1月から2024年6月までに Kyoto AR 動物高度医療センターまたはフクナガ動物病院にて MVP を実施した犬 70 例を対象とした。内訳は ACVIM 分類における Stage B2 が 21 例、Stage C が 37 例、Stage D が 12 例で、これらの退院率及び死亡原因を調査した。また術後1年以上経過した 37 症例について画像パラメータとして術前と術後1年時の VHS、LA/Ao、LVIDDN、E波の比較と、1年生存率、内服残存率を調査した。

3. 結果：MVP 実施後の退院率は 90% で、死亡例の内訳は急性呼吸窮迫症候群 4 例、敗血症 1 例、低酸素脳症 1 例、不

整脈 1 例であった。術後1年経過した症例の生存率は 86.5% であり、術前後 (術前→術後1年) の画像パラメータは VHS：11.45 (10.1-14) → 9.7 (8-10.7)、LA/Ao：2.62 (1.75-4.18) → 1.4 (0.95-1.91)、LVIDDN:2.1 (1.5-2.4) → 1.4 (0.9-1.8)、E波：1.34m/sec (0.94-1.48) → 0.79m/sec (0.4-1.09) であった。投薬残存率は 9% で、1 例は中等度 MR 残存例でピモベンダンの継続、2 例は肺高血圧症に対してシルデナフィルを継続した。

4. 考察および結語：MMVD は進行性の疾患であり、多くの場合内科治療が先行して行われるが心不全の発症を遅らせることはできても MR の根治は不可能である。一方で、MVP は形成の完成度に左右されるが MR を制御することで鬱血性心不全の発症リスクを回避でき、心臓への負荷が軽減され投薬の必要性が多くの場合なくなる。手術手技及び周術期管理の精度の向上と更なる長期予後の検証は必須だが、MVP は症例の QOL を大きく改善させる治療効果があると考えられる。